

近現代における宮座の変容と持続

—江辻のお日待ちを事例として（福岡県）—

九州大学付属図書館付設記録資料館 山口信枝

1 目的

この報告の目的は、近現代における宮座の変容過程を実証的に調査し、宮座の存在意義を考察することである。宮座は一般的には「神事について独占的な権能を氏子内部においてもつ集団」とされている。その定義は「特権的祭祀組織」説と「神事組合」説がその代表的なものである。宮座はその加入資格において「一定の家筋に属する者に限られる株座」と「氏子であることが参加条件とされる村座」の二類型が設定されている。本論では「宮座は産土神社において座と称する祭祀集団であり、株座と村座を含む」という基本理解のもとに考察をおこなう。座は人口増加が続く都市化した地域に持続する座である。宮座はその地域の宗教行事のみならず、政治、経済、社会、人間関係と密接に結びついており、村落共同体におけるさまざま場面において宮座構成員が関係している。本報告は2010年の出版（文献参照）後に実施した調査である。

2 方法

そこで、データとして宮座の聞き取り調査を実施した。これに並行して座に引き継がれる史料を解読し、祭祀の現状とその変容過程を推察した。本論で報告する「お日待ち」とは、前夜から潔斎して寝ずに日の出を待ち拝む祭祀である。福岡県糟屋郡江辻地区かすや えつじに引き継がれている祭は、史料によると開始は永禄年間（1558～1569年頃）に悪疫退散のために開始されたと記述されている。座員は「お日待ち」を「座」と呼称し、座員が退会した場合は家筋を守り、新たな加入者は認めない株座である。江辻100軒といわれ28軒が座員であり、現在は13軒である。

3 結果

分析の結果、それぞれ多様な形をとりながら現代も持続している宮座の機能と存在意義は、①ムラの団結と統合意識の強化（ムラの自治運営）、②自己認識の獲得、③ムラの秩序確認（伝統意識の保持）、④親族交流であると考えられる。特に「お日待ち」の事例では、神事に次世代の男性後継者が参加し、祭のしきたりや歴史、座員に対する対応の仕方を学んでいく。女性は座には参加しない。本座の妻は自宅の台所を開放し、手伝役の2家の妻とともに定められた料理の準備をする。男性はドジョウ汁を作りそれら中で情報交換がおこなわれる。

4 結論

近現代におけるムラの政治や経済、社会、人間関係等は様々な要因が交錯しており宮座の視点だけから考察することには限界がある。しかし産土神社のもとで集合し、行動をともにし、会話する。これらはムラの統合をはかり、自治を運営していく重要な契機になっている。宮座が持つ機能は、村の自治意識の希薄化や自己認識の喪失感、社会生活の営みが自由である一方で不安な現代社会において、改めて現実感を伴う体験として必要とされているのではないだろうか。今後も無視出来ない宮座の機能が生き続けていると考える。

(*写真:「お日待ち」朝のお勤め)

文献

山口信枝, 2010, 『宮座の変容と持続』弦書房。

